「第４回　おいしいね　たのしいね！」地域貢献事業開催報告

塩田博子・堀尾昇平・高杉志緒・芳賀絵美子・濱田英司

Report on the fourth *"It's a delicious and Fun!"* Extention Lecture Jointly Organized by the Departments of Nutritional Science and Early Childhood Education and Care

by
Hiroko Shiota，Syohei Horio，Shio Takasugi，Emiko Haga，Eiji Hamada

要旨

本稿は、平成25（2013）年度に初回開催して以降、年１回の頻度で開催している本学主催の地域貢献活動「第４回　おいしいね　たのしいね！」に関する報告である。栄養健康学科教員・ボランティア学生を主体とした「親子クッキング」、保育学科教員・ボランティア学生を主体とした「親子でふれ合う活動」（手作りおもちゃ制作・伝承あそび等）を行う両学科による親子体験活動は、過去３回とも参加家族から好評であったため、平成28年度も同じ趣旨で講座を開催した。過去の活動と比べて特記すべき点は、第３回目と同様に今回も「子どもゆめ基金」（独立行政法人　国立青少年教育振興機構）の助成を受けた地域貢献事業として開催したことが挙げられる。その他、過去の開催に基づき、①託児の外注（第３回目から開始）、②開催回数（日数）の検討（平成25年度は１日、26年度は３日、27年度・28年度は２日）、③午前の食育活動（栄養健康学科教員担当）、④「大型絵本読みきかせ」活動の継続（第３回目から開始）、⑤午後の親子活動（保育学科教員担当）、以上を検討して実施した。過去３回の開催と同様、主な開催目的である「地域住民に対し家庭における「食育」の重要性を伝える」「親子がふれ合う時間と遊び（初回・２回：手作りおもちゃ、３回：伝承遊び、４回：大型工作体験）の良さを味わう機会を提供する」双方を概ね達成することができ、参加学生も「食育」「保育」及び「家族の交流（ふれ合い）」の重要性を学ぶ機会を得ることができた。今後も双方の学科の特性を生かした合同の地域貢献事業を継続し、「食育」「保育」及び「家族の交流」の重要性を伝え、ふれあいの場を提供することを通じて地域貢献を実現していきたい。

キーワード：食育基本法、食育推進基本計画、子育て支援、親子クッキング、保育、段ボール工作、絵本読み聞かせ、家族交流

1　はじめに　―本事業報告の趣旨―（事業開催起案者：塩田博子）

内閣府による食育推進基本計画では、平成28年度から平成32年度を第3次食育推進基本計画として第2次食育推進基本計画の最終評価と重点課題、目標及び具体的な施策などをあげ、食育推進活動を行っている。更に下関でも平成25年度から29年度までの5年間を「第二次下関ぶちうま食育プラン」として各ライフステージにおいて、多様な活動が行われている(注1)。

このような社会的動向に基づき、本学では2学科（栄養健康学科・保育学科）の専門性を生かした地域貢献事業「おいしいね　たのしいね！」を平成25年度より開催している(注2)。

最初に過去3回の概要を振り返りたい。開催時期は毎年6月が「食育月間」、毎月19日が「食育の日」となっているため6月の開催を主軸として実施している。開催日数は、平成25年度第1回は1日間、平成26年度第2回は計3日間（定員数超過の申し込みをふまえ6月に2日、7月に1日）、平成27年度第3回は計2日間である。参加者の満足度について実施アンケートの回答をみると、「今日全体を楽しくすごしたか」に対して「はい」という回答が、平成25・26年度共に100%、27年度は97%を得ることができ、自由記述欄には「また参加したい」という声も寄せられた。

このような過去3回の参加者満足度・開催スタッフの反省会に基づき食育・保育・家庭交流の推進を図るため、平成28年度も継続的な講座の開催が必要であると分析し、平成28年度、第4回「おいしいね　たのしいね！」事業を行うこととなった。

開催にあたり第2回まで問題となっていたのは、運営費・運営形態〔①参加者徴収参加費の軽減分による学校会計負担の増加、②参加対象者（3歳～就学前家庭のため3歳未満児の兄弟姉妹を持つ参加家庭）に対する安全な託児サービスの提供〕であった。これらを解消して事業を継続するため第3回は、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」（平成13年創設、以下「子どもゆめ基金」と略記）に助成応募を行ったところ採択されたので、運営費・運営形態の改善（①学校会計負担の減少、②専門家が運営する託児サービスの外注）を図ることができた(注3)。

従って、平成28年度第4回（今回）も「子どもゆめ基金」に応募を行った。応募締め切りは、平成27年11月、即ち開催前年度にあたるため、平成27年10月、第4回の開催目的を担当教員で話し合った。その結果、開催目的は、①「世代間交流・家族間交流」、②「地域住民に対し、家庭における「食育」の重要性を伝える」、③「モノづくりの意識向上・創造力の構築」、④「講話や「食育」を主題とする絵本を通じて食に関する知識の増進・読書推進を図る」、

以上４点とした。

第３回（前回）との大きな相違点は、③「モノづくりの意識向上・創造力の構築」を目的に加えた点である。前回は、「世代間交流・家族間交流」を目的とした午後の活動として「伝承遊び」を行ったが、今回は「モノづくり」を通じた「世代間交流・家族間交流」を目的として「段ボールでお城を作ろう」という企画を立てた。目的を新たに加えた理由として、年に１回の開催を心待ちにして、継続して参加している家庭もあるため、異なった目的・活動を企画する必要性があると捉えたこと、午後の活動を指導する担当教員の変更、以上２つに起因する。

以上のような経過をふまえて、平成27年11月に「子どもゆめ基金」に助成を応募した結果、平成28年４月中旬に採択通知を受け、第３回と同様に地域貢献事業として実施した。

以上をふまえて過去３回とは特に異なる点を中心に「第４回　おいしいね　たのしいね！」地域貢献事業の報告を行う。

2　実施準備について―広報・募集・会計・託児・受付―
（担当教員：芳賀絵美子・高杉志緒）

以下、今回の実施のための概要について、即ち実施前に準備した広報、募集（参加者募集）、会計（収入・支出）、託児・当日受付について記す。

【広報】

広報活動については、第３回以降「こどもゆめ基金」採択決定後の４月末から始めている。

無料広告は地域情報誌「ほっぷ」（株式会社地域情報新聞しものせき、５月20日発行）に掲載され、チラシ（**図１**）は、前回と同様に旧市内の77施設（幼稚園21園、認定こども園10園、保育所40園、児童館４館、その他２施設）への郵送および訪問配布を引き続き行い、ショッピングセンターや市の施設にも配置して頂いた（**表１**）。

図１　配布チラシ

開催に関する報道は、ＮＨＫ山口放送局の取材による同日

表１　下関旧市内施設へのチラシ・ポスターの配布先

	郵送	訪問配布	合計（件）
幼稚園	21	0	21
認定こども園	8	2	10
保育所	38	2	40
児童館	4	0	4
その他	2	0	2
合　計（件）	73	4	77

「山口のニュース」（昼・夕方2回）における約3分間の放映紹介、新聞報道「50人が楽しく親子料理教室」（『毎日新聞』下関版、6月27日朝刊）による掲載紹介、以上2つのメディアで紹介された。

【募集】

募集（参加対象）は、過去3回の開催と同様、3歳～小学校就学前の子どもとその保護者とし、第3回目と同様、開催日は6月25日㈯・26日㈰の2日間で各日定員は子ども24名、保護者24名とした。応募方法は初回からの方法を継続して往復葉書による郵送のみで、締め切りは6月3日金曜日消印有効とした。葉書による応募者は41家族109名であり定員を超過していたが、急な欠席を見越して抽選は行わなかった。その結果、実施日の参加者は、6月25日㈯が16家族43名、6月26日㈰が19家族50名となった。

【会計】

第3回と同様に「子どもゆめ基金」の助成金（260,540円）を受けた。大まかな支出の内訳は、参加者募集用チラシの印刷と郵送・託児の外注・「モノづくり」材料費・当日参加ボランティア学生と卒業生への謝金・事務費である。但し、食材および保険料は助成対象外となるため第3回と同様、学内における公開講座予算と当日の参加費収入で賄った。参加費は、前回までのアンケート結果と食材の値上がりを勘案し、幼児・保護者は各300円、託児（食事有）300円、託児（食事無）200円とした。外部資金の受託と参加費収入により本学が負担した金額は前回より軽減され、約5000円に収まった。

【託児・当日受付】

第3回から開始した未満児の託児外注については、前回と同様、専門の託児業者に依頼した。前回との違いは、託児時間の延長（前回は午前中のみ、今回は午後の講座終了時まで）と託児場所の変更が挙げられる。託児の流れについては前回と同様、朝、参加家族全員による受付終了後（**写真1**）、託児が必要な家族は別途、業者による受付を行った（当日朝の書類記載有）。業者による受付終了後、今回、新たに場所を設けた「託児室」にて対象児が過ごせるよ

写真1　受付（参加家族と担当学生2名・教員）

写真2　託児室内の状況
（マットと玩具・ベビーベッド）

うにした（**写真２**）。

託児時間と場所の変更は、前回の反省と午後の活動内容の違いに基づく。

第３回は「親子で伝承遊び」であったため託児時間は午前中の調理実習時間のみとし（10時～11時30分頃まで）、昼食（会食）と午後の活動「伝承あそび」は家族と一緒に過ごして頂くことを主眼とした。しかし、午前中から寝ている子どもをそのまま保護者に渡さねばならない状態となり、３歳以上の参加者親子での活動が困難になった家庭があった。また、託児場所は午後の活動場所と重複していたので、午後の開始時間内に片付ける必要があった（**図２**）。

今回（第４回）の午後の活動は「段ボールでお城を作ろう」という親子で体験できる大型工作としたため、参加者が活動に集中しやすい環境を作ること、託児の子どもに対する安全性、以上２点を考慮して、託児時間を講座終了まで延長し、場所を午後の活動と重ならないよう隣接した別室とした（**図２**【第４回託児室】、平常は「学友会室」）。

平成28年度「第４回　おいしいね　たのしいね！」会場（２号館２階）見取り図　（【　】内が当日使用場所）

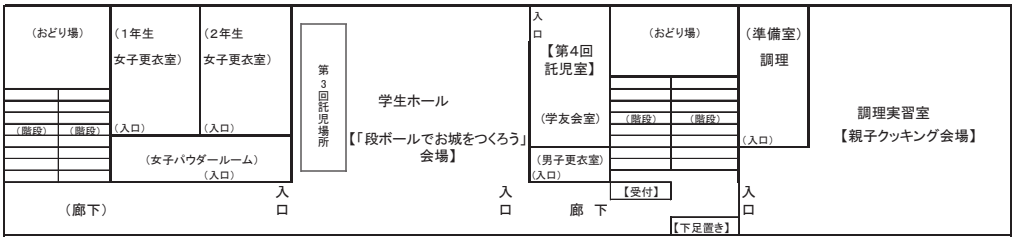

図２　平成28年度「第４回　おいしいね　たのしいね！」会場見取り図

託児の利用については、両日合計７名（初日：４名、２日目：３名）が事前に応募したが、当日の欠席が重なり、結果的には３名（初日：１名、２日目：２名）が利用した。託児時間を延長し、別室を確保できたので、参加家族は午後の活動に集中しやすくなり、前回より広い場所が使用できるようになった。同時に託児の子どもには、午睡しやすい環境が確保できた。

3　実施内容報告

今回の主活動は、午前：親子調理・会食、午後：親子工作であった。従って本章では、調理（**3・1**）、親子工作（**3・4**）を中心に活動報告を行う。

3・1　調理　―親子クッキング―

3・1・1　献立作成（担当教員：塩田博子、芳賀絵美子）

前回のアンケートで作ってみたいという意見の多かった「肉じゃが」をヒントとし、昨年度

表２　子ども１人分の栄養価

料理名	エネルギー（kcal）	タンパク質（g）	塩　分（g）
おむすび	219	4.5	0.7
とりじゃが	149	7.1	0.8
すいか	19	0.3	0.0
牛乳	101	4.9	0.2
合計	488	16.8	1.7

の反省を活かして、作業量を少なめ（幼児が楽しんで取り組める程度）にした献立作成に取り組んだ。その結果、メニューは「おばあさんがつくってくれた“おむすび”」「だしかおる！とりじゃが」「きせつのくだもの～すいか～」「ぎゅうにゅう」の４つとした（**表２、写真３**）。なお、牛乳アレルギーのある参加者には、代替品としてリンゴジュースを提供した。

写真３　当日の盛り付け例

（プレート手前左）「おばあさんがつくってくれた“おむすび”」
（プレート右奥）「だしかおる！とりじゃが」
（プレート奥）「すいか」
（枠外）「ぎゅうにゅう」

３・１・２　調理班と配布資料について（指導者：塩田博子、芳賀絵美子）

ひとつの班を２～３家族とし、各日８班を編成した。初回～３回目までは、家族ごとに「動物マーク」を印刷した名札を使用していた(注4)。しかし、班を編成して活動する際、幼児は、自分がどの班に所属しているのか認識しにくかったため、今回は班別に動物マークを使用することを試みた。

参加者に班分けを伝えたのは、当日朝の受付時である。参加者が受付（参加者の確認と参加費の徴収）を行った際「○○班です」と伝えながら動物の絵が入った名札を手渡した。

その後、調理実習室に移動して所定の机に着席後、各家族に資料を配布した。配布資料はレ

写真４　冊子「ひでんのしょ」

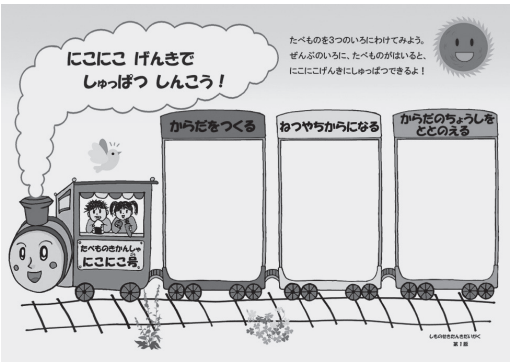

図３　たべものきかんしゃにこにこ号

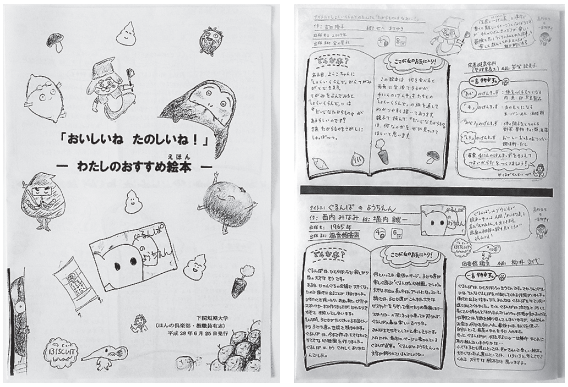

写真５　パンフレット「わたしのおすすめ絵本」（表紙・末頁）

シピ「おやこくっきんぐれしぴ」、「ひでんのしょ」（子ども向け資料、**写真４**）、「たべものきかんしゃにこにこ号」（**図３**）、「幼児期の食生活と食育」（保護者向け資料）、「わたしのおすすめ絵本」（学友会公認部活動ほんの倶楽部・教職員有志作成、**写真５**）、以上５点である。

調理に関する配布資料は、幼児に安全で衛生的な調理の基本を伝えることを目的とし、レシピとは別に「ひでんのしょ」という媒体を作成した。これは第２回以降、子どもが手に取りやすいようにＡ５サイズの小型にしたパンフレットを改変した物である。今回は、導入のペープサート「おむすびころりん」（後述）に合わせてＡ５版の紙をつなぎ「ひでんのしょ」という巻物の形にして、幼児に興味をもってもらえるよう工夫した。更に、前回も配布した「たべものきかんしゃにこにこ号」[注3]は、ラミネート加工し、自宅でくりかえし使えるものにした。使い方の説明は、会食後の食育講話の中で行った。

また、受付後に渡した配布物の１つであるリーフレット「わたしのおすすめ絵本」は、前回に引き続き家庭での読書推進、即ち「食」に関する絵本に親しんで頂くために作成・配布した。掲載した本は６冊である。内容は、午前中に読み聞かせを行った大型絵本「たからものはなあに」、午後の保護者に記入を依頼した折に読み聞かせを行った北村裕花「おにぎりにんじゃ」平成26年、２冊を含む「食」に因んだ絵本（食べ物・会食を楽しむことを扱った絵本）６冊の紹介である（きむらゆういち「ひとりでうんち」平成元年、かがくいひろし「だるまさんと」平成21年、石津ちひろ 文；山村浩二 絵「くだものだもの」平成16年、西内みなみ 文；堀内誠一 絵「ぐるんぱのようちえん」昭和40年）。当日に読み聞かせを行った２冊は担当教員、その他の４冊は学生・教職員有志４名が各１冊ずつ選んだ。掲載内容は、作者・書名・出版年といった書誌情報をはじめ「どんな本か」（概要）、「（推薦者の）お気に入り」の部分など、参加保護者を対象としたイラスト入り紹介文を掲載した。

３・１・３　調理前の説明について（指導者：塩田博子、芳賀絵美子、高杉志緒）

前回は、調理実習に先立って30分程度の全体レクチャーを行った。しかし、実習に時間を取りたいという思いから、レクチャーの内容を省略しすぎてしまったため、説明不足だという指摘があった。従って、今回は手洗いから調理の方法まで、レクチャーを丁寧に行うことにした。

写真６　ペープサート「おむすびころりん」

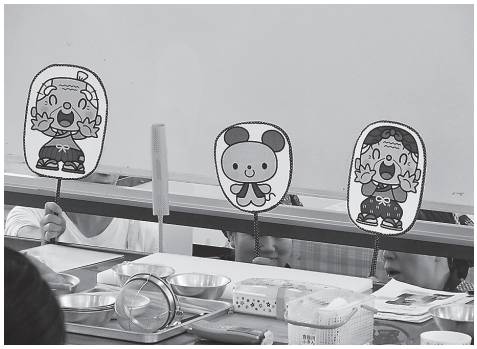

写真７　ペープサート「ひでんのしょ」の紹介場面

また、レクチャーへのスムーズな導入として、献立にちなんで「おむすびころりん」のペープサートを行うことで、参加幼児の興味を引き付けるように工夫した（**写真６**）。また、ペープサート中、各自に配布した冊子「ひでんのしょ」を登場人物が紹介することによって、冊子の内容への関心を高め、次に行う説明や、作業への親近感が湧くように工夫した（**写真７**）。

３・１・４　調理について（指導者：塩田博子、芳賀絵美子）

調理作業については、作業量が多いことや年少児には困難な作業があるなど対象者の把握が不十分だったという前回の反省を活かせるよう事前に計画して実施した。前回より作業量を少なくして、幼児が楽しんで取り組める作業量を考えながら献立作成に取り組み、班編成も同年代の幼児を同じ班にするのではなく、なるべく年少児から年長児までが一つの班に入るような配慮を行った。

このように年齢構成を考えた班編成を試みたが、急な病欠者等による当日の欠席が多く、事前の班編成が活かせなかった。来年度以降は、当日の欠席を見越した班編成が必要になると考える。

丁寧なレクチャーと各班に補助として入ったスタッフ（ボランティア学生と卒業生）の手厚い見守りが活きて、今回も負傷者もなく調理を終えることができた（**写真８**）。

写真８　各班に分かれての調理作業風景

写真９　班別のテーブルでの会食風景

会食は、調理班別のテーブルに分かれて行い、各班に補助として入ったスタッフも同席した（**写真 9**）。他方、今回はスタッフ食を別途作らなかったこともあり、第３回まで使用していた調理実習室階下の給食実務実習室は使用しなかった。各班に入らなかった作業準備スタッフ・教職員は、別途昼食をとった。また、前回まで食器洗浄は給食実務実習室で行っていたが、今回は食育面も考慮して（使用した食器を片付ける作業など）、参加者とスタッフで行った。

3・2　大型絵本読み聞かせ「たからものはなあに」（指導者：高杉志緒）

過去３回は、保育学科「食育表現ゼミナール」所属学生（第１回３名、第２回２名、第３回３名）も本活動にボランティア参加しており、1）親子クッキングの班別調理活動の補助、2）大型紙芝居発表・大型絵本読み聞かせ、以上の２つを中心に活動を行ってきた。しかし、平成28年度は所属学生がいなかったため、保育学科２年生２名が食育絵本の読み聞かせを行った（**写真 10**）。

写真 10　大型絵本読み聞かせ

後者の大型絵本読み聞かせは、第３回から食育推進・読書推進の目的で行っている。前回は、①当日の献立や活動に関連した内容を主題とする、②３歳児にも理解しやすい、③「親子クッキング」の会食時に楽しめる、④約50名の参加者を対象とするため大型絵本とする、以上４点に配慮して、エリック・カール作・森比左志訳「はらぺこ　あおむし」（偕成社、平成６年）を選書して当日、読み聞かせを行った。今回は、読み聞かせ終了後の講話（「食べ物きかんしゃにこにこ号」を媒体とした講話）を考慮して、吉田隆子作・せべまさゆき絵「しょくいくランドのたんけん　たからものはなあに？」（金の星社、平成19年）を選書した。全頁数32頁で３歳児には少し長く難しい内容と想定されたが、①３人のげんきな子ども達が、列車「げんきッズごう」に乗って冒険を行い赤（主菜）・緑（副菜・緑黄色野菜）・黄（主食）・白（汁物）の貨車にそれぞれの食材を積んでゆく内容が後続の講話と直結する、②「げんき！　げんき！　シュッポ　シュッポ　げんき！」という３歳児にも分かり易いフレーズが文中に繰り返されており楽しみながら聞くことができる、③「みんなでたべるとうれしいね」という場面があり会食の大切さが表現されている、以上３点からこの本に決定した。

今回は前回に引き続き会食の終了間際に行ったが、前回、導入として行った学生達による手遊びは行わず、今回は担当教員が「楽しいことを始めますよ」と呼びかけてから読み聞かせを始めた。会食終了前に始めたので、子ども達に落ち着いて聴いて頂けるのか不安な面もあった

が、ほとんど私語もなく、最後まで鑑賞する姿がみられた。

3・3　講話（指導者：塩田博子・芳賀絵美子）

写真 11　読み聞かせ後の講話（食べ物機関車使用）

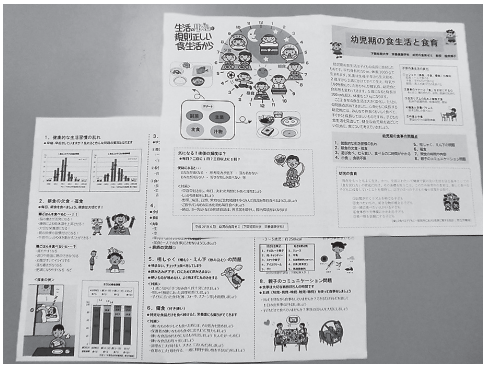

写真 12　配布資料「幼児期の食生活と食育」

昼食・大型絵本読み聞かせ後の講話には、教室内に掲示した「食べ物機関車」（**図 3**、**写真 11**）、および今回指導教員（塩田）を中心として作成・配布した資料「幼児期の食生活と食育」（保護者向け資料、**写真 12**）に関する内容を説明した。「幼児期の食生活と食育」の中には、最近の幼児期の食生活の問題点と家庭の中でできる改善策を挙げている。同時に講話担当者（塩田）が担当する「幼児の食育ゼミナール」で行った調査の一つ「幼児の好きなお菓子や飲み物」を挙げながら間食についての適切な内容や量、時間などもデータとして掲載している。これらについて、絵本読みの終了後、保護者が完全に食事を終えた時間を見計らって 10 分程度の概要説明を行い、「幼児期の食生活と食育」等の資料を持ち帰って家族でゆっくりご覧頂くように紹介した。

3・4　大型工作「段ボールでお城をつくろう」について（指導者：堀尾昇平・濱田英司）

3・4・1　午後の活動の目的・内容・活動場所について

過去 3 回、午後は「伝承遊びゼミナール」を主体とした活動を行ってきた。（第 1 回・2 回「手作りおもちゃの制作」、第 3 回「伝承遊び」）。今年度から担当教員が代わったことに伴い、「親子がふれ合う時間とダイナミックな制作や遊びの機会を提供する」という目的のもと、参加者全員で「段ボールのお城づくり」を行った。

過去の活動を振り返ると、手作りおもちゃについては、第 1 回「割り箸鉄砲」、第 2 回「トントン相撲」を制作し、その場で制作したおもちゃで遊ぶ活動を行った。第 3 回「伝承遊び」では、「わらべ歌」を通して体を動かし、親子・家族間の関わり合いを広げる活動を行った。但し、午前中に親子クッキングとして調理作業を行った後での活動となるため「午後は、より開放的な環境のもと、日常生活の中では体験できないようなテーマで親子の交流を深める活動

を行ってみてはどうか」という意見が今回の企画に伴い教員の中から出た。そこでこの意見を勘案して「段ボール工作」に重点を置いた活動を計画した。

また、段ボールを使用した「お城づくり」という内容に関しては、①それぞれの家族で作り上げたものを最終的につなぎ合わせ、まとめ上げることで、一つの大きなお城が完成するという感動が得られること、②完成したお城の中に入り、段ボール迷路のように作品内外で遊べること、③最後は、子どもたち全員でお城を攻め、積み上がった段ボールのお城を体当たりで壊すというダイナミックな遊びに発展できること、以上３つの理由から決定した。

活動場所は、第３回と同様、普段学生たちが団らん・食事を行う共有スペースである「学生ホール」の全室を使用した（**図２**）。先に述べたように、前回と異なる点は、託児スペースの変更である（**2・1**）。第３回は学生ホールの一角を託児スペースとして使用したが、本年度はより広い場所が必要であり活動に集中しやすくすること、託児の安全性、２つの観点から隣接する部屋（学友会室）を託児スペースとした。午後の活動を行った「学生ホール」は、普段は木製のテーブルや椅子が置いてあるが、活動中の安全面に配慮し、壁際及び学生ホール外の廊下の隅に移動させた。

3・4・2 「お城をつくろう」使用材料と環境整備について

「お城づくり」に使用した主な材料は、段ボール、飲料用紙パック、ペットボトルである。形や大きさがそれぞれ違う段ボール箱を主体として土台に使い、飲料用紙パック、ペットボトル、新聞紙などをお城の飾りの素材として活用できるように学内で調達したものを準備した。特に飲料用紙パック（１ℓ）は、４月中旬から学生・教職員に呼びかけて回収を行い、約600個集めることができた。

写真 13　種別に置かれた材料（紙パック）を手に取る参加者

写真 14　会場内「ツウロ」（通路）表示

当日は、材料を入口・通路とは反対の会場奥に種別にまとめて置き、配置した（**写真 13**）。

また、洗面台の前には衝立を置いて子どもが使用できないように配慮した。同時に、大きな段ボールをはじめとした荷物の運搬や、館内１階にあるトイレを使用する際の移動が円滑に行えるよう、学生ホール内に通路を設けた（**写真 14**）。その他、会場の工夫としては、活動内容・組み立てたお城が具体的にイメージできるように可視化することを目的として、段ボールで作り上げるお城の完成図を参考例として模造紙に描いて掲示することによって、作るお城のイメージが共有できるように配慮した（**図 4**）。

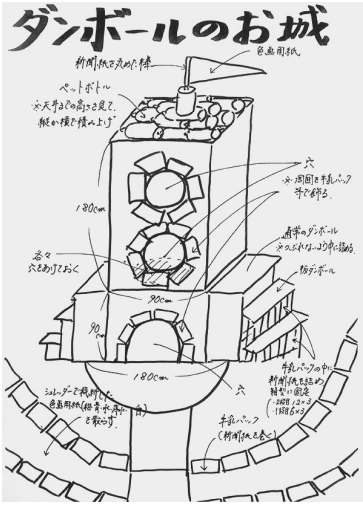

図 4 完成図（参考例）
「段ボールのお城」

当日の指導は保育学科教員２名があたり、保育学科のボランティア学生（2 年生、1 日目：11 名、2 日目：7 名）が援助にあたり、以下の順（導入、主活動、まとめ）に活動を行った。

3・4・3 「お城をつくろう」における導入活動

調理・会食後、休憩・移動時間をはさんだ後、両日とも 13 時から活動を開始した。ボランティア学生の簡単な自己紹介後、最初に段ボールを使用してお城づくりをすることを教員が伝えた。事前に用意した段ボール（約 100 箱を畳んだもの）、ペットボトル、飲料用紙パックを示しながら、最初に城壁や門等、城を形成する一部分について、各家庭で自由に制作をした後、最後にそれらを合体させて一つの大きな作品を作り上げることを説明した。最終的に完成するお城の大きさは、塔やお堀なども含めて会場（学生ホール内）いっぱいに広がり、中央にそびえる主塔は３m以上ある天井に付く程の高さになることを想定した。そのため、掲示した完成イメージ図を紹介し（**図 4**）、活動内容への見通しが付くよう工夫するとともに、活動への期待が高まるよう配慮して説明を行った。また、制作においては、会場全体を使って自由な活動が行われるため怪我をすることが無いよう、以下の注意を口頭で行った。特に配慮したことは、①会場内を走り回らないこと、②必要に応じて使用するハサミやカッターナイフなどの文具の取り扱いに気を付けること、以上２つについて説明をした。

3・4・4 「お城をつくろう」における主活動（展開・まとめ）

主活動すなわち制作は、家族ごとの活動を中心に行った。特定のグループ分けは行わず、基本的に親子・家族間で自由にイメージを広げ、思い思いに制作を進めていくよう展開した。今回、予定した「段ボールのお城づくり」の主な流れは、次の通りである（①～⑥）。

写真 15　親子による部分的な城づくり

写真 16　部分の合体

写真 17　完成したお城（6 月 25 日）

写真 18　壁に絵を描いたり、中に潜ったり
して遊ぶ子ども達

写真 19　新聞紙の兜と紙製の甲冑を付ける様子

写真 20　甲冑を着てお城を壊す子ども達

①段ボールなどの材料を使い、各々城壁や門等、お城を形成する一部分について制作をする（**写真 15**）

②各々が作った部分を中央に集め、一つの大きなお城にまとめ上げる（**写真 16、写真 17**）

③全員でお城の前で記念撮影を行う

④完成したお城の全体を眺めたり入ったりして自由に遊ぶ（**写真 18**）

⑤お城に攻め込むため学生が作った新聞紙の兜と紙製の甲冑を着て準備する（**写真 19**）

⑥甲冑・兜を装着した子ども達が体当たりでお城を壊す（**写真 20**）

このような６つの工程を主体とした２日間の活動の実践を通じて、参加者の年齢や当日の進行状況に合わせて、所要時間を変える必要があることが分かった。例えば、初日は上記、②や④の時間が多くかかった。また、初日の反省から２日目は、色付きのガムテープ（黄・黄緑・赤・青）を準備して、お城の壁にあたる段ボールの側面に貼れるようにして色も楽しめるように工夫した。④の自由な遊び時間については、初日、集中力が途切れがちな子もみられたので、２日目は予定時間を若干、短縮するよう配慮して、臨機応変に対応した。制作においては基本的に親子で一緒に活動を進め、活動場所などを限定しないことで、その場の流れに合わせて比較的自由な雰囲気の中で進行に配慮した。親子での関わり合いを重視し、各々が持つお城のイメージを広げながら活動を展開するように進めた。活動の締めくくりとして、お城に攻め込み体当たりで壊す時には、事前に学生達が作った兜と鎧（甲冑）を子ども達に装着してもらった。兜は新聞紙で折ったものであり、甲冑は段ボールとビニール紐で作り、赤や黒の色を塗って、好きな色を選べるようにした。これらを子ども達が身に付けることにより「お城に攻め入る」というダイナミックな活動への意欲を高められるよう配慮した。

以上、①～⑥の流れを中心とした本活動は、段ボールをはじめとした身近な材料を使って短時間で大きな制作物を作り、最後には壊すことで元の形に戻して終了することを主旨として行った。このように制作物が活動後に残らないため、③の記念写真撮影によって、参加者の充実感を高め「まとめ」や「ふり返り」が後日も出来るよう配慮した。その他にも思い出に残る活動となるよう教員やボランティア学生が適宜、「よく頑張ったね」「大きいお城が作れたね」など、声掛けを行い、楽しい雰囲気の中で進められるよう配慮した。更に、この活動の終了時には、全体を通しての活動の達成感が得られるよう教員から「自宅でも親子での制作や遊びを共に楽しんで頂きたい」という意向を伝えて参加者全員に対する声掛けを行った。

3・5　参加記念品「写真立て・記念メダル・ぬり絵」について（指導担当者：濱田英司）

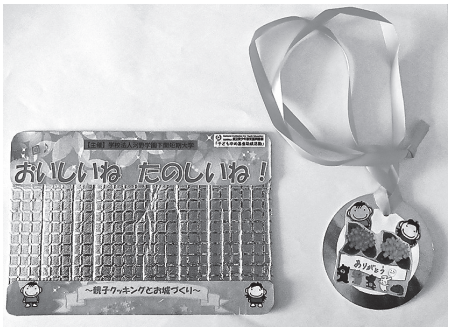

写真 21　お土産の写真立て（左）とメダル（右）

午後の活動「お城をつくろう」の終了後、担当教員の手作りによる３つの参加記念品を渡した。配布目的は、一日の活動を締めくくるにあたって参加者、特に子どもたちに充実感・達成感を味わってもらうためである。

記念品の１つ目は、完成したお城の前で撮影した集合写真を入れた写真立てである（**写真 21 左**）。お城完成後に撮影した記念写真をすぐに現像し、

写真 22　新聞紙の兜を付けたままお土産の集合写真を入れた写真立て・メダル・塗り絵を受け取った子ども

「おいしいね　たのしいね！～親子クッキングとお城づくり～」と記した写真立てに挟み込み、１家族につき１枚の記念品とした。２つ目は、「おいしいね　たのしいね！」裏面に「ありがとう」と記した記念メダルである（**写真 21 右**）。３つ目は、会場内に掲示したものと同様の「ダンボールのお城」と記したぬり絵（Ａ４判）である（**図 4**）。第３回は午前中の活動に関連した「ピザ」の塗り絵であったが、今回は、午後の「お城づくり」に関連したぬり絵を配布した。

これら３つに関する工夫点は、次の通りである。①全員で作り上げた段ボールのお城を写真という形で残し、家庭でも思い出を共有できるように配慮した、②子どもが首から下げて持ち帰れるメダルにすることで、帰宅後も思い出を身近に感じられるようにした、③実際に自分たちの手で作り上げた段ボールのお城のぬり絵にすることで、自分の好きなデザインに塗り上げる楽しさが期待できる、以上３点が挙げられる。これら３つの「お土産」を参加記念品として、終了時に学生から子どもを対象に１人ずつ手渡した。お城づくり・攻撃活動の終了後に渡したため、その余韻を楽しんでいる様子の参加者もみられ、兜をかぶったまま記念品を受け取った子どももいた（**写真 22**）。

4　アンケート実施・集計・報告と省察（担当教員：塩田博子）

閉会式の前に、１家族につき１枚、代表の保護者に１日の活動全体に関するアンケートを記入して頂いた。用紙は、当日学生ホール内ですべての活動終了後に配布、記入、回収を行った。第３回目の折、保護者アンケート記入の間に、子ども達に絵本の読み聞かせを行い、子ども達が静かに待つことができるように配慮したところ保護者は記入に集中できたので、今回も記入時に絵本の読み聞かせを実施した（**写真 23**）。選書は、午前の活動（お

写真 23　アンケート記入時間に絵本読み聞かせを聞く子ども達と保護者

にぎりづくり)、午後の活動（お城づくり)、双方を勘案して北村裕花作「おにぎりにんじゃ」(平成 26 年）を選書した。前回は学生が読み聞かせを行ったが、今回は教員が担当した。

アンケートの調査項目は前回との比較を考慮し、ほぼ同内容の質問とした。具体的には、次の 6 項目 13 問である。(1）参加者について、(2）募集方法について【①この公開講座をどこでお知りになりましたか】、(3)「調理実習」について【①自分たちで作ったものは美味しかったですか、②親子で楽しむことができましたか、③次回、調理実習で作ってみたいメニューはなんですか、④幼児の栄養についてのお話は分かりやすかったですか？】、(4) 絵本読み「たからものはなあに？」について【①絵本を理解できましたか、②読むスピードはいかがでしたか】、(5)「段ボールでお城をつくろう」について【①お城づくりの説明は分かりやすかったですか、②遊び方は難しかったですか、③お城づくりは楽しめましたか】、(6）全体について【①今日一日楽しく過ごせましたか、②ご意見・ご感想をお聞かせください】以上である。なお、(3）の③、(6）の②は記述式とした。集計方法は、エクセルを用いた単純集計である。参加の 35 家族中 34 家族にアンケートへ回答していただき回収率は 97.1%であった。

4・1　参加者について

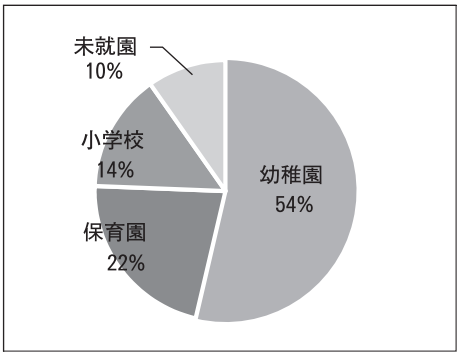

図 5　幼児の参加者は？

幼稚園に通う子どもの合計が約半数を占め、次いで保育園が 22%であった（図 5)。昨年度は、幼稚園が約 70%を占めていたが、本事業が多様な環境の家庭に浸透しつつある様子がうかがえた。

アンケートに基づき、幼稚園と保育所における参加者の合計比率を見ると、26 年度 92%、27 年度 87%、28 年度 76%であり、対象となる幼児の兄弟と思われる未満児及び児童の参加が増加していると考えられる。本来の対象目的は幼児であるため、対象年齢を明示し、チラシ等で周知する必要がある。但し、対象年齢の幼児より年長とはいえ児童のみ自宅に残して外出は困難という事情を抱える家庭もあることが窺えるため、今後の対応を検討する必要がある。

また、平成 27 年 4 月より「子ども・子育て支援新制度」が本格開始されたことに伴い、下関市内でも「認定こども園」が整備されつつあるため(注 5)、今後、就学前の幼児を対象とした企画に関するアンケートを実施する場合、回答の中に「認定こども園」という項目を増やす必要がある。

4・2　広報（募集方法）と参加費について

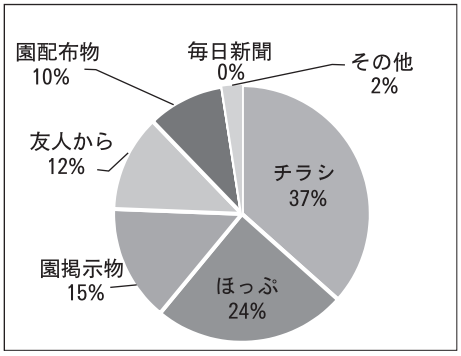

図６　情報の入手先は？

募集情報の入手先については、チラシが最も多く、次いで「ほっぷ」、園での掲示物、友人から、園配布物であった（**図６**）。今後も市内幼稚園・保育所等へのチラシの郵送およびほっぷなどの地域情報誌、市の施設への設置など継続する必要がある。また、アンケートに下関短期大学の HP で告知してほしいという意見もあった。インターネット環境が日々進化している現状を踏まえ、ホームページ上での告知も視野に入れる必要がある。

4・3　調理実習について（担当教員：塩田博子、芳賀絵美子）

「おいしかったですか？」では「おいしかった」が 100％であった（**図７**）。「調理を楽しめましたか？」では、全員が「とても楽しかった」、「楽しかった」と回答した（**図８**）。

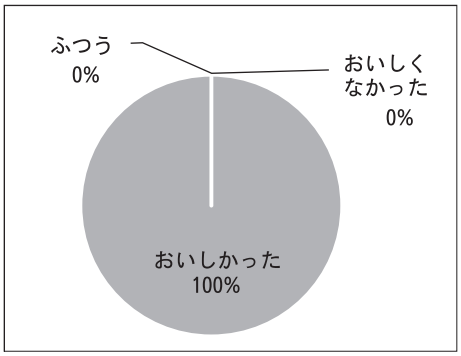

図７　おいしかったですか？

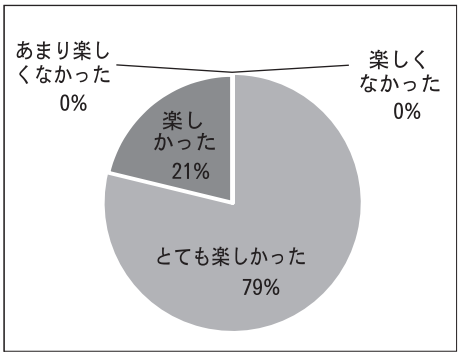

図８　調理を楽しめましたか？

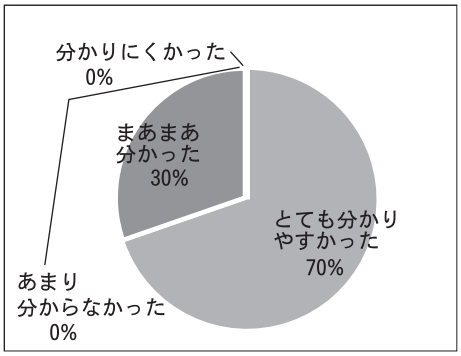

図９　幼児の栄養についてのお話は
分かりやすかったですか？

また、「『幼児の栄養』についてのお話は分かりやすかったですか？」については「とても分かりやすかった」が 70％、まあまあ分かったが 30％であった（**図９**）。今回は、全員に集中して講話を聴いて頂けるように「この野菜を食べたことがある人？」など、子ども達への質問を交えて話を進めた。子ども達は大きな声で質問に反応し、多くの保護者も大きくうなずく等の反応があり、しっかり話を聴く体制を築くことができたと感じている。同時に、幼児期の食

の在り方に関する問題点への改善策を理解して頂く目的を概ね達成できたと思われる。

次回作りたいメニューで多かったのは、「お菓子」（8名）、「和食」（7名、手打ちうどん・三食丼・みそ汁ほか）、「カレー」（4名）、「ピザ」（5名）、「ハンバーグ」（4名）、などであった。前回の回答で作りたいメニューに「肉じゃが」が挙げられていたことに基づき、今回は「おむすび」と「とりじゃが」を作った（**3・1**）。前回に続き「おいしくなかった」と答えた家族が皆無であったことに注目したい。今後も出来るだけ現状のニーズに応じた献立を考え、親子で調理をすることによって「家庭における『食育』の重要性を伝える」「子ども達に『遊び』（親子で調理をする）を通じて食の楽しさ・大切さを伝える」という活動目的が達成しやすくなると考えられる。今後も保護者の多くの意見を勘案しながら、次回の開催方針を組み立てたい。

4・4　絵本読み「たからものはなあに？」について（担当教員：高杉志緒）

午前中、会食時に行った読み聞かせについて2つの質問を行った。

1つ目の質問、「本の内容を理解できましたか？」では「よくわかった」35%、「まあまあ分かった」47%で、合計約8割の参加者が本の内容を理解できたことが分かった（**図10**）。前回の「はらぺこあおむし」については、アンケートの結果、参加者の9割以上が既に読んだことがある本だったが、今回は殆どの参加者が初めて読む絵本と想定されたので、理解度を質問させて頂いた。

2つ目は、理解度と読む速さの相関関係をさぐるため「本を読むスピードはいかがでしたか？」という質問を行った。回答は「とてもゆっくりだった」12%、「ちょうどよかった」82%という結果であり、約9割の参加者にとって適度な速度での読み聞かせであったことが分かった（**図11**）。

この結果から、読む速度は良かったが、約15%の子ども達には「あまり分からない」即ち難しかったということが窺えた。理解しにくかった理由としては、1冊（32頁）の読み聞かせに約15分近くの時間がかかったことから途中で飽きてしまった、「宝物を探しに行

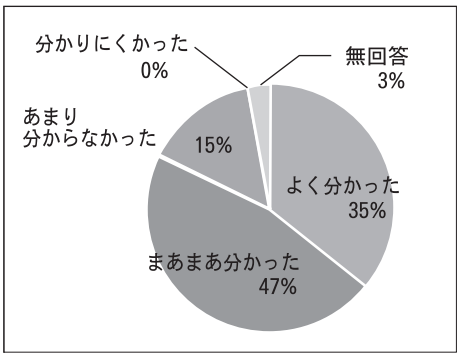

図10　「絵本の内容を理解できましたか？」

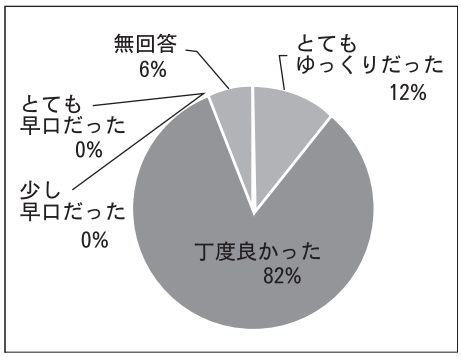

図11　「本を読むスピードはいかがでしたか？」

く」というストーリーは分かりやすかったものの栄養素に関連する事項については十分理解がしにくかった、という２つが考えられる。本事業の参加者は、３歳～就学前と年齢に幅があるため、今後更に選書を工夫したい。

4・5 「お城づくり」について（担当教員：堀尾昇平・濱田英司）

「お城づくりの説明は分かりましたか？」では、「とても分かりやすかった」が71%、「まあまあ分かった」が29%を占め、「分かりにくかった」と回答した方はいなかった（**図12**）。「遊び方は難しかったかですか？」では「とても簡単」と「まあまあ簡単」を合わせると70%となった（**図13**）。約７割が「簡単」と感じられたように「お城をつくる」という目的意識がはっきりしていたこと、比較的単純な制作活動を行ったこと、学生が適宜、援助や声掛けを行って充実感を味わえるように工夫したことによって、「わかりにくかった」参加者がいなかったと考えられる。

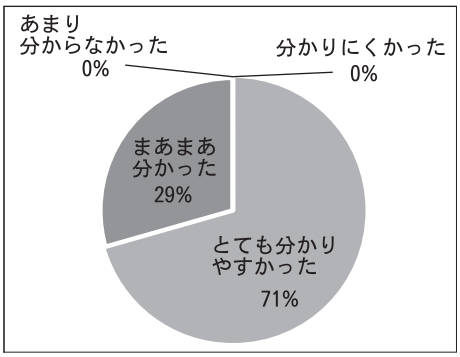

図12　お城づくりの説明は分かりましたか？

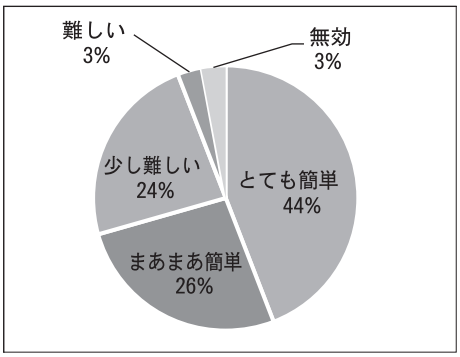

図13　遊び方は難しかったですか？

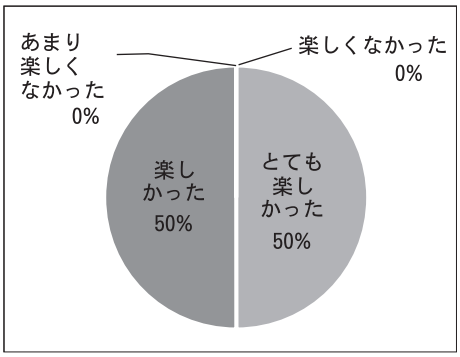

図14　お城づくりは楽しめましたか？

また、「お城づくりは楽しめましたか？」では「とても楽しかった」、「楽しかった」がそれぞれ50%を占め、「楽しくなかった」と回答した家族はいなかった（**図14**）。従って、総合的にみると、開催目的の１つである「親子がふれ合う時間と遊びの良さを味わう機会を提供する」、または「モノづくりの楽しさを味わう」という目的を概ね達成できたと考えられる。以上のアンケート結果を踏まえて担当教員の省察を次に述べる。

制作活動においては、思わぬ混雑や怪我が想定されたため、各自の作業スペースが十分に取れるように配慮し、屋根・塔・城壁など制作する内容に応じて場所を分けた。この区分けによ

って、大きな混雑が回避できただけでなく、お互いが時にイメージを共有しながら活動を進めていくことにも役立った。進行については、教員が主に全体の進行を行い、各コーナーに2～3名の学生を配置したことで、参加者からの質問や子どもたちの声にもすぐに対応し、関わり合いを広げていくことができた。完成後、お城の前で参加者全員が記念撮影を行い、その後、お城の中に入って遊ぶ時間では、城壁部分に乗ったり、窓から顔を覗かせたりする姿がみられ、大型制作物ならではの楽しみ方が見られた。また、活動の最後に、子どもたち全員で体当たりをしてお城を壊すという活動においては、全身を使って全員で一つの目標に立ち向かうという開放的な遊びが展開できた。同時に、「作る」から「壊す」という目的と動作の転換によって、子どもたちの期待を高め、存分に楽しむことができたと考えられる。ただし、反省点もいくつか挙げられる。

1つ目は、事前の準備・環境構成が十分に行き届いていなかったことである。ボランティア学生を中心として、前日に実際の活動内容を想定して会場作りを行ったが、実施時に不十分と感じた。当日の作業効率や安全面を配慮して、試行錯誤を行ったつもりであったが、開催直前まで段ボールや材料を置く場所の修正・準備を行う結果となった。

2つ目は、午前の活動を終え参加者が会場内に入ってきた後、その後の活動について伝える導入の折、落ち着いた雰囲気を作り出すことができなかった点である。事前の説明・注意事項の伝達が子どもたち全員に対して十分に浸透していなかったため、一部のエリアで制作活動における混雑、及び男子1名が指先を切ったという小さな怪我につながってしまったと思われる。

3つ目は、制作活動を行う際の声掛けについてである。危険を伴う文具の使用に関しては、ボランティア学生か保護者の立会いのもとで行うよう徹底して声掛けを行っていた。ところが、ハサミを持って歩き回る子どもの姿が見られ、安全管理において不十分な点が生じてしまった。また、コーナーごとに学生を配置していたが、学生の関わりにも個人差があり、親子の関わりを傍観し、単に「見守る」だけの姿勢が散見された。終了後のアンケートにおける自由記述においても、(学生が)「せっかくいるのだから、もう少し積極的に子どもたちに関わって欲しかった」というご意見も頂いており、参加するスタッフ間でもさらに意識の統一を図っていく必要がある。

4つ目は制作活動に要する時間が長すぎたことである。当初お城の制作には各々で1時間、各部分をまとめ上げ最終的な完成に20分という時間を予定していた。しかし、年齢が低い子どもの中には、集中力が続かず途中で飽きてしまう子も見られた。終了後のアンケートでも、初日、「作る時間が長すぎた」というご意見があったため、2日目は初日の状況も考慮して、制作時間を45分に短縮した。2日目は、スタッフ側も幾分作業に慣れて制作活動が効率よく進めることができた結果、制作時間の短縮により参加者全員が集中することが出来たので、充

実した活動が展開できた。

５つ目は、記念撮影後、完成したお城に入るといった自由に遊ぶ時間が短かったことである。計画当初は、出来上がったお城の前で写真を撮り次第、順次お城を攻める（壊す）準備に取りかかる予定であったため、出来上がったお城で自由に遊ぶ時間を十分に設定してはいなかった。終了後のアンケートでは「段ボールのお城でもっと遊ばせたかった」「せっかく作ったのに、すぐに壊してしまうのはもったいない」といったご意見が寄せられた。一方で、「お城をみんなで壊すというのが意外で楽しかった」というご意見も頂いた。大型制作を行い、遊びを展開していく上でも、満足感を高める配慮が大切であることが分かった。

６つ目は、全員でお城を壊す時の安全面への配慮である。壊したお城の壁、崩れてくる段ボールが当たりそうになった子どもがいた。また、段ボールを潰す時に切り傷・擦り傷を負いそうになる場面が散見された。さらに、潰した段ボールを会場の隅に積み上げた際、その上に乗り、滑って転倒してしまう子どもがいたため、事前の注意が必要であった。

以上のような反省点はあるものの、当初に定めた「親子がふれ合う時間と、ダイナミックな制作や遊びの機会を提供する」という目的は概ね達成できたと思われる。また、アンケートの結果に見られる参加者の満足度の高さからも、充実した活動であったと窺えよう。

4・6　全体について

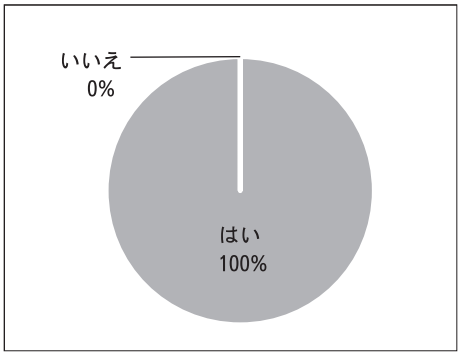

図15　今日１日楽しく過ごせましたか？

「今日一日楽しく過ごせましたか？」という設問に対しては、「はい」が100％を占めた（図15）。

感想・意見欄には、「託児があり上の子と楽しく過ごすことができました」「また参加したい」「今年も楽しかった」「調理が子どもにもできることがわかった」「家でもやってみようと思います」「段ボール城はすごかった。家ではできない」「ワイルドな遊び方ができて良かった」等の好意的な意見が多数寄せられた。反面「月齢によって食事の量を加減しては？」「お城で遊びたかった」「子供の体力・集中力が切れないか心配」などの意見も頂いた。

5　おわりに　―今回の反省と今後について―

前章のアンケート結果や各回終了後に開催したボランティア学生を交えた反省会をふまえて、６つの観点（班分け、媒体展示、献立、食育関連の説明・講話、一日の流れ、ボランティ

ア学生の参加）に分けて、総合的な反省・考察、今後の展望について述べる。

【参加者の班分けについて】

事前に往復葉書による参加者連絡を基に参加家族の人数・子どもの年齢を考慮して調理班を分けて名札を作ったが、体調不良等による当日の欠席者が出た（初日：5家族、2日目：2家族）。中には、人員数は変わらなくとも兄弟（異年齢児）における変更（姉の代わりに妹が参加）、夫婦での参加者変更（都合により妻の代わりに夫が参加、あるいは当初妻のみの予定が夫婦で参加）などが相次いだため2日間とも当日朝、班編成を急遽変更せざるを得なかった。

更に、前回までは、家族ごとの動物マークを印刷した名札を使用していたが、今回、動物マークは班別の使用とした。そのため当日、急きょ編成しなおした作業班と名札に印刷した動物マークとの食い違いが生じてしまった。動物マークと当日の班編成が異なった結果、あるアンケート用紙の自由記述欄には「他の班の人が混じって作業をしていました」という回答がみられた。

従って、今後は当日朝、受付にて参加者の人員が確定後、実情に応じた班編成を行う必要があると考えられる。より、現状に合った対応を行うため、班編成をいつ、どのように決定するのか、告知方法も含めて、更に検討を進めたい。

【媒体展示について】

前回（第3回目）は、午後の遊びの一隅に「清涼飲料水の糖分を砂糖に換算したもの」など、食育に関する媒体展示を行ったが、今回の活動が大型工作のため広い場所が必要ということもあり、媒体展示をしなかった。従って、今後は、媒体と講話の関連づけを含めて、検討を進めたい。

【献立について】

今回は、第3回のピザとマカロニサラダに比べて、切砕作業や作業工程が少ない献立であった。デザートのスイカもスタッフが切り分け、参加者は盛り付け作業のみを行うよう簡略化したため、全体的に、ゆとりをもって実施することができた。その結果、講話の時間を充実させ、会食後、自分達が使用した食器の片付けの手伝いを行うことができたので、今後も献立作成時から時間配分・構成を考えて計画を立てたい。

【食育関連の説明・講話について】

受付終了後、最初の説明時、子ども達にも集中して聞いてもらえるようペープサートを使った導入を行ったところ、好評を頂いた。説明内容の充実は勿論だが、今後も導入の工夫を継続したい。また、前回の会食後の講話は、調理作業時間が多く必要だったため配布資料について簡単に説明するのみにとどまったが、今回は、掲示物を使って10分程度、説明をすることができた（3・3）。従って今後も、当日の献立・媒体展示との関連付けを含めて、講話を充実させたい。

【一日の流れについて】

一日の流れについては、評価できる点と改善すべき点、双方１つずつ挙げられる。評価できる点は、午前・午後、全体の流れを考慮して活動を展開しようと試みた点である。午前の調理と午後の遊びを主体とした活動は、指導担当者が異なるため、スムーズな接続が従来から課題であった。

例えば、第３回目は、午前の献立（ピザ・マカロニサラダ・フルーツヨーグルト）と午後の活動（伝承遊び）の関連付けについては、特に配慮を行わずに実施した。しかし、今回は午前：おにぎり作り、午後：お城づくり、という活動内容を意識して、午前の挨拶中に「午後は大きなお城づくりをするから沢山食べようね」といった声掛けや、アンケート実施時に読み聞かせの選書（前掲「おにぎりにんじゃ」は、おにぎりの姿をした忍者が敵方のお城に潜入する内容）を試みた。今後も、午前と午後の活動、双方を視野に入れた活動内容・媒体展示の検討を行いたい。同時に、今回初の試みとして午前の調理説明の導入で献立（おにぎり）にちなんだ昔話のペープサートを披露したところ好評を頂いたので、今後も子どもが魅力を感じられる導入・まとめの工夫を考えたい。

改善すべき点は、時間配分である。初日は、予定終了時間15時に終了したが、２日目は先述の通り（4・5）、初日（お城を）「作る時間が長すぎた」というご意見があったため、制作時間を短縮した結果、２日目は、予定時刻より約45分早い14時15分頃に終了した。そのため、参加家族の中には、送迎の待ち合わせ時間を調整せねばならず、「お迎えが来るまで、この会場で待っていても良いですか」と尋ねた方がおられた。このように終了時刻に予定時間より30分以上の差異が出るのは問題であることを痛感したため、今後、計画の検討・実施時間の調整に対してより一層の配慮を行いたい。

【ボランティア学生の参加について】

本活動は、第１回目から教職員だけでなく、ボランティア学生・卒業生にもスタッフとして補助を依頼して実施してきた。しかし、前回から顕著となった動向として、ボランティアに意義を感じ、積極的に参加する学生が減少している様子がみられることが課題として挙げられる。

例えば、午後の活動の援助を行った保育学科のボランティア参加学生をみると、参加人数の推移は、第４回：初日11名・２日目７名（２年生のみ）、第３回：７名（１年生４名・２年生３名）、第２回：20名（１年生10名・２年生10名）、第１回：７名（１年生７名）という動向であるが、第２回目までは開催日の全日程（２日間あるいは３日間）を全日（午前・午後）参加する学生が殆どであった。しかし、第３回目からは初日のみ参加、あるいは半日のみ参加、開催日に行う片付け後の反省会は欠席するという学生が半数以上を占めるようになった。具体的な数を挙げると、第３回（前回）両日参加した学生は５名であったが、今回は２名のみだっ

た。同時に、今年度当初、保育学科2年生にボランティアの参加希望を募った時には19名が手を挙げたが、実際に参加したのは初日が11名となり、約4割の減少がみられた。

今回、反省会まで参加した学生の中には「自分も楽しかった」「家族で楽しんでもらえて良かった」という感想や、栄養健康学科2年生の中には「卒業してもまた参加したい」という感想を持つ者もいた。このように、実際にボランティアを体験してみると充実感を味わえることが窺える。従って、学生に対してどのようにボランティアの意義や充実感を伝えて参加を促して体験学習を展開するのか、今後の課題としたい。

注）参考文献

1）下関市編集発行：「下関ぶちうま食育プラン」，pp. 46，2008年、下関市編集発行：「第2次下関ぶちうま食育プラン」, pp. 50，2014年
2）塩田博子・稲員祥子・高杉志緒・芳賀絵美子：「第2回「おいしいね　たのしいね！」公開講座開催報告」『下関短期大学紀要』33号，pp.53-71，2015年3月
3）塩田博子・高杉志緒・芳賀絵美子・稲員祥子：「第3回「おいしいね　たのしいね！」公開講座開催報告」『下関短期大学紀要』34号，pp.43-66，2016年3月
4）塩田博子・高杉志緒・芳賀絵美子・稲員祥子：「第1回「おいしいね　たのしいね」公開講座開催報告」『下関短期大学紀要』32号，pp.67-92，2014年3月
5）下関市こども未来部こども育成課編集：「下関市子ども・子育て支援事業計画」，pp.177，2015年，下関市発行